研究 No. 0801

中国内モンゴル自治区東ウジュムチンにおけるゲルの調査

主査　中山　徹[*1]
委員　武藤　康弘[*2]，山本　直彦[*3]，呼日勒沙[*4]，巴根那[*5]，

本研究では，牧畜民の定着化に伴い姿を消しつつあるゲルについて，特定地域における調査を実施し，その実態を把握した。調査地では，生活に使うゲルは減少しているものの，牧畜経営の多様化により，長期に渡る放牧や，冬季のゲルの需要が確認できた。また，1980年代後半以降に導入された固定家屋であるバイシンは，1990年代後半から2000年代にかけて急速に普及し，多機能で大規模な平面プランへの変遷が確認できた。しかし，今後は牧畜サイクルや使用人数，季節等に適応した住居の導入も検討課題である。

キーワード：1）ゲル，2）モンゴル族，3）牧畜民，4）定着化，5）平面計画，6）居住実態，
7）内モンゴル自治区，8）牧畜経営，

INVENTORY OF YURT(GER) IN EAST UJIMQIN BANNER IN THE INNER MONGOLIA AUTONOMOUS REGION OF CHINA

Ch.　Toru Nakayama
Mem.，Yasuhiro　Muto，Naohiko　Yamamoto，Hurilesha，　and　Bagenna

In this study, a inventory of the yurts in East Ujimgin Banner of Inner Mongolia that are disappearing as nomads have begun to settle was conducted. In the region surveyed, while the number of yurts for daily living has decreased, there is a certain demand for yurts for long periods of while herds graze and for the winter season due to diversification of the cattle feed business. Further, it was confirmed that transition to large scale floor planning with multi-function dwellings is occurring as baisin, a kind of fixed house that was introduced in the late 1980's, have spread rapidly from the late 1990's to the 2000's. However, it is still necessary to review the introduction of housing that is appropriate for the grazing cycle, the number of people who use such structures, and the seasons during which they are used.

1.　はじめに

1.1　研究の背景と目的

中国内モンゴル自治区では，古くからモンゴル族が遊牧生活を営んできたが，農耕化や漢族化，都市化が進み，伝統的な移動放牧は姿を変えてきた。特に，1980年代初頭家畜の私有化と土地の使用権化が始まり，また，2000年代になると，環境対策や資源開発を理由とする生態移民政策によって牧畜業そのものの縮小及び牧畜民の定着が一気に加速した。それに伴い移動式天幕住居であるゲルが急速に姿を消し，代わりに土造やレンガ造の固定家屋バイシンが普及している。

このような事態を受け，内モンゴル自治区でもゲルを再評価し，保全しようという動きが出始め，2007年には自治区の無形文化遺産に登録された。しかし，具体的な保全方法が明確でない上に，日常生活や牧畜で使用されるゲルの減少には歯止めがかかっていない。このまま事態が推移すると，近い将来，生活で使用するゲルが消滅するのではないかという危機感に基づき，本研究では以下の点について基礎資料を収集し，今後の方策を検討することを目的とする。

1）特定地域において悉皆調査を実施し，年間を通じたゲルとバイシンの利用実態を把握する。
2）バイシン導入の過程と平面プランの変遷について把握する。

1.2　本研究の位置付け

牧畜民の放牧方法の変遷や定着化については，民族学や文化人類学の分野で多数の研究がみられる。しかし，ゲルやバイシンといった住居を主として扱っているものは少ない。また，扱っていても数事例の紹介にとどまっている。ゲルからバイシンへどのようにモンゴル族の空間構成が引き継がれているかを分析したもの[文1)]や，更

[*1] 奈良女子大学人間文化研究科・准教授
[*2] 奈良女子大学文学部・准教授
[*3] 奈良女子大学生活環境学部・准教授
[*4] 中国・内蒙古大学蒙古学学院・教授
[*5] 中国・内蒙古大学蒙古学学院・講師

には都市空間にその空間構成がいかに反映されているかといった分析[文2)]はある。しかし，2000 年代のゲルやバイシンの実態について体系的に述べているものは見当たらない。

そこで本研究では，ある特定の地域においてなるべく多くの事例調査を行うことで，モンゴル族牧畜民の近年の住環境変化について詳細な分析を行う。さらには年間を通じた調査によってゲルとバイシンの使い分け等を記録する。これらの基礎資料の収集と分析は，今後近代化のなかでモンゴル族が独自の文化をどのように維持，および発展させていくかという問題を考察するに際し，重要であると考える。

1.3 調査地の選定

内モンゴル自治区は中国北部に位置し，面積も 118.3 万㎢で日本の約三倍と広大であり，自然環境，社会環境等は地域によって大きく異なっている。その文化区域は大きく 5 つに分類することができる（**図 1-1**）。

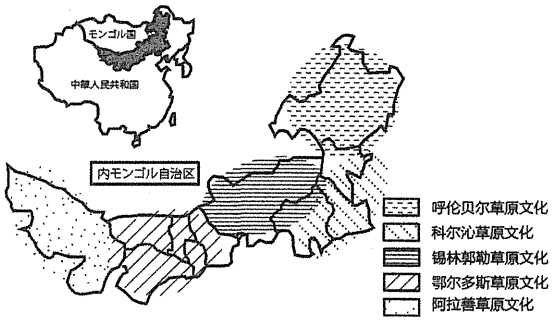


図 1-1 内蒙古近現代草原文化区域分布

＊文献 3) p. 44 に筆者が加筆修正したもの

このうち，最も農耕化や漢族の影響を受けているのは科尔沁（ハラチン）で，モンゴル族にも農業や半農半牧が浸透しており，定着化も顕著である。鄂尔多斯（オルドス）は沙漠及び草原文化を受け継いでいるが，大都市が位置していることもあり，都市化の影響が顕著で，また漢族の影響も強い。阿拉善（アラシャン）は広大な沙漠での牧畜の伝統が今でも残っているが，幾度も自治区から他省に編入されるなどして漢族の影響も大きく受けている。さらには 2000 年代以降沙漠化により禁牧政策が実施されており，牧畜業の縮小が顕著である。呼伦贝尔（フルンボイル）と锡林郭勒（シリンゴル）は，最も豊かで広大な草原が残っている地域であり，現在も移動放牧を主とする牧畜民が多い。特にシリンゴル盟[1)]は牧畜，伝統行事等の文化をよく受け継いでおり，ゲルの無形文化遺産登録においても中心的な役割を担っている。

そこで，シリンゴル盟の中でも最も面積が広く，モンゴル国との国境に近い東ウジュムチン旗[2)]を調査対象地に選定した。モンゴル族の割合は 8 割を超えており，農耕化，都市化，漢族化といった影響は比較的小さく，伝統的な生活を残していると同時に，近年の環境変化が顕著な地域であると想定した。

自治区の最少行政単位であるガチャ（村に相当）については，東ウジュムチン旗の政府関係者に依頼し，許可のとれた地域での実施となった。

調査地は，シリンゴル（锡林郭勒）盟・東ウジュムチン（东乌珠穆沁）旗・ガタブチ（嘎达布其）鎮・バインジラガガチャ[3)]（白音吉力嘎嘎查）で，旗の行政公署（ウリヤステイ鎮）の北方（車で約 40 分）に位置する（**図 1-2**）。モンゴル国との国境付近で 129 世帯の村である。ガチャのなかで，漢族の 3 世帯を除きモンゴル族世帯のモンゴルゲル所有率は 100%，このうち 1 年に 1 回以上使用している世帯は約半数である。

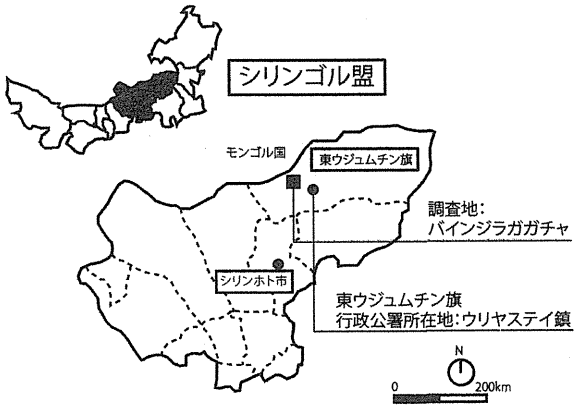


図 1-2 調査地位置図

1.4 調査概要

第一次調査は 2008 年 9 月 8～10 日，20～22 日に実施し，調査地の選定及び概要把握，調査世帯では牧畜方法，ゲルの利用実態，バイシン導入時期やその経緯等について聞き取りを行い，また住居及び家畜小屋等の実測調査を行った。第二次調査は 2009 年 2 月 24～26 日に実施し，冬季のゲルの使われ方に着目するため，ゲルを利用している世帯に絞ってゲルとバイシンの利用実態や牧畜形態について聞き取りを行った。第三次調査は 2009 年 6 月 15～17 日で，春・夏営地での放牧に使用するゲルを中心に聞き取り及び実測調査を実施した。第四次調査は，2009 年 9 月 19～22 日で，ゲル，バイシン，牧畜の実態を聞き取り，またバイシンを中心とした実測調査を実施した。

上記 4 度にわたる調査で，調査世帯の総数は計 36 世帯である。当初の目的は当該地域での悉皆調査であり，その為の助成を受けたが，ガチャ内でゲルを使用しているのは約 60 世帯であり，全世帯には及ばなかった。しかし，調査時期には，国境付近への外国人の訪問や社会調査に対して制限があった為，許可がおりた範囲内で把握することとなった。

2. 牧畜形態の概要とその変化

ここでは，聞き取りに基づき，調査地での牧畜形態とその変化について記述する。

2.1 伝統的な四季移動

伝統的なモンゴル族の遊牧は，地域差があるものの，大まかには春・夏・秋・冬という四季によって宿営地を移動する。春営地は家畜の出産シーズンを迎える2月から6月初旬頃まで，その年に産まれた家畜が成長したところで夏営地に移動する。8月末から9月頃になると，秋営地へ移動する。この頃には，オトルと呼ばれる臨時的な移動を繰り返し，家畜を太らせて冬に備える。また，牧草の刈り取り等も行う。11月末から12月頃には冬営地へ移動する。季節風を避けるところなど自然条件を判断して設営する。

2.2 移動放牧の変化

1980年代までは，明確な土地区分は無く，牧草と水の様子をみて頻繁に移動が繰り返されていた。1年に10回以上，多い場合は1～2日ごとに移動し，2週間も同じ場所には留まらなかったという世帯もある。移動距離も様々で，各宿営地間は30～50km ほど，場合によっては約300km 離れた場所まで移動することもあった。移動手段は専ら牛車で，各世帯7～10台ほど保有していた。

1980年代になると，人民公社の解体に伴い，家畜が各世帯に分配された。その際，土地についても使用権の分配が始まり，長距離移動及び，頻繁な移動は減少した。この頃から固定家屋であるバイシンも少しずつ建築されはじめる。それでもまだ，ゲルを利用して四季を通じた移動をする世帯は多かった。

1990年代，土地の測量が厳密となり，1996～1998年には30年契約で再分配される。土地の境界を柵で囲う世帯が増え，自由な移動放牧は事実上消滅した。畜舎，さらには住居としてバイシンを建築する世帯が急増し，番地も与えられた。これを機に定着化が一気に加速することとなる。

2.3 現在の放牧方法

調査地において，各世帯に分配されている土地面積は，概ね7000～10000畝（1畝＝666.7 ㎡）程度が一般的である。区割りは様々であるが，2km 四方，あるいは2×3km 程度の区画となる。この敷地のなかで井戸，畜舎，住居の固定化拠点を設ける。更には，春・夏・秋・冬の四季で区画を分けて放牧する「輪牧」の形態が推奨されている。これは，限られた土地の中で牧草を有効利用する方法である。但し，敷地内の土地区分は各世帯により異なっており，四季だけに限らず二季や三季で分ける場合もある。あるいは毎年の区画を定めておらず，年毎に様子をみて使い方を決めるという世帯もある。

更に，近年増加しているのは，借用地である。分配された敷地以外にも土地を借りて放牧面積を増やしている世帯が，21世帯確認できた。借用地を必要とする理由としては，以下の3パターンが考えられる。

1つは，1990年代に土地分配されてから後に婚姻などで増えた世帯が，兄弟・親戚間でさらに土地を分配し，輪牧するのに十分な面積を保有していない場合である。

2つ目は，内モンゴル全体で進行している沙漠化の影響で，牧草の状態が年々悪化しており，冬季に十分な牧草を確保できないからである。その場合，比較的牧草の状態が良い土地を借りて移動する。数年に一度と言われる大きな旱魃や雪害などから家畜を守るためにも借用地が必要である。

3つ目は，牧畜業の拡大である。働き手不足や，子どもの就学等の理由より牧畜業を辞めて都市部へ出た世帯の土地や家畜を請負う場合，また分配された土地だけでは飼うことが難しくなった馬等の大型家畜を集約して保有するという例がある。あるいは越冬や旱魃対策の牧草を育てるための草刈り地を保有し，牧草の売買も行うこともある。

牧夫の雇用も増えている。本調査では10世帯で牧夫の雇用が確認できた。

以上より，現在の放牧方法として，まず分配された敷地内に固定化拠点を設け，そこから敷地内での短距離移動，あるいは借用地への中・長距離移動を行うというパターンが確認できる。この移動のことを「オトル」と呼ぶ。オトルとは元来馬群を切り離して放牧する際に用いられていたが[文4)]，その他の家畜についても家族全体の季節移動とは別に，一部の者が，一部の家畜を連れて，一時的に移動する分派的な移動を表わす言葉として知られている[文5)]。

しかし，現在，調査地では移動の距離，時期，家畜の種類，担い手，期間に関わらず，居住バイシンのある固定化拠点から離れたところで放牧し，またそこに移動放牧の拠点を構えることをオトルと呼んでいる。

3. 年間を通じたゲルとバイシンの利用実態

ここでは，各世帯が年間を通じてゲルとバイシンをどのように使い分けているのか利用実態をみる。特にゲルの保有状況及び利用時期について，オトルの期間にも着目して把握する。

3.1 ゲルの保有状況

調査事例では全世帯がゲルを保有しており，1年に1回以上は使用が認められる（**表 3-1**）。その用途は主に放牧であるが，長期（半年以上）あるいは短期（半年未満）の使用がある。家族全員が長期にわたってゲルに居

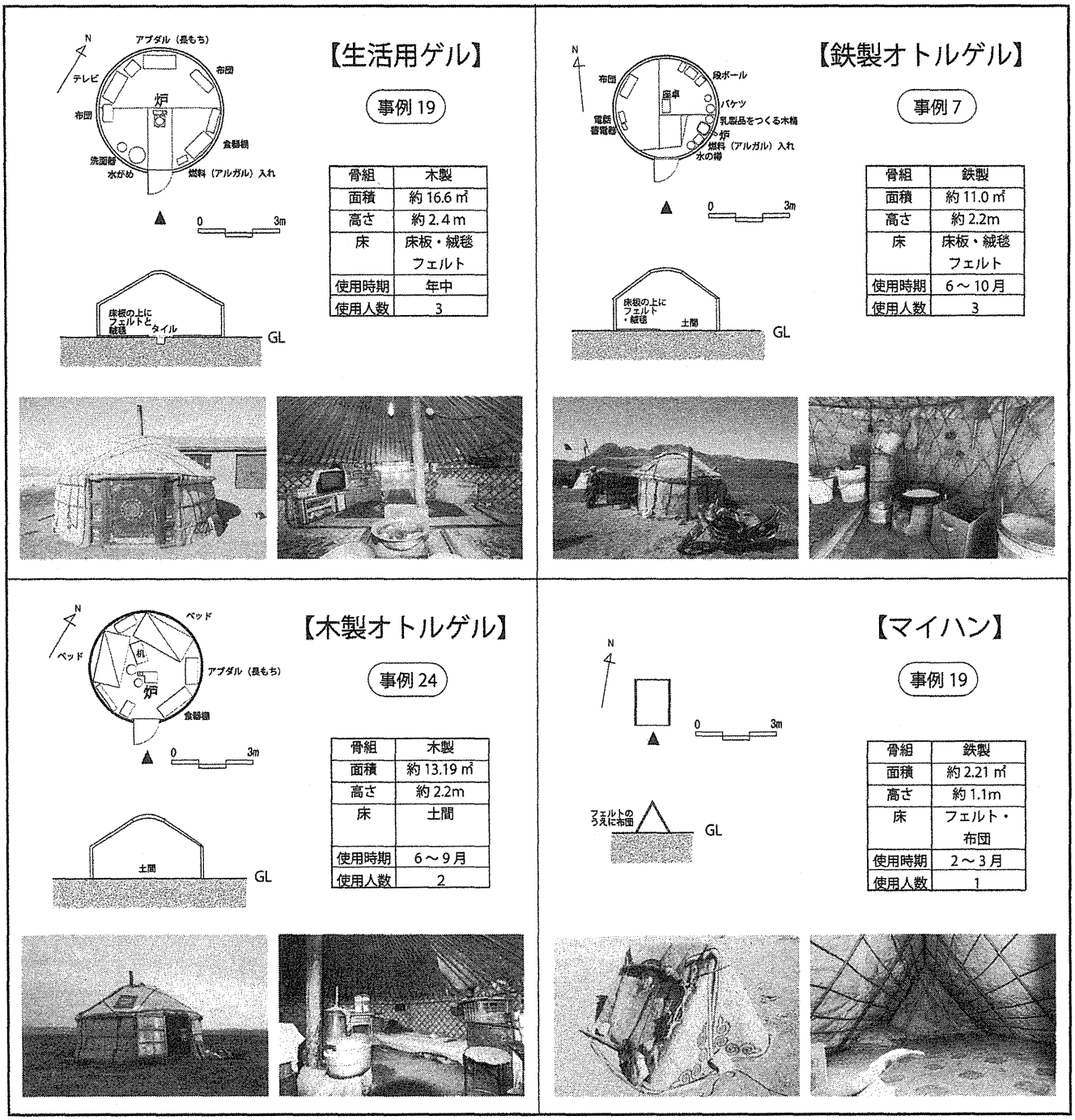


図 3-1　ゲル用途の事例

表3-1　ゲルの所有状況

事例		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
ゲル保有数		1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	2	1	1	2	2	2	1		1	1	1	1	2	2	1	1	2	2	2	1
用途	生活/長期放牧用					●											●	●		●						◎		◎						◎			
	短期放牧用	●	●		●		●	◎	●	●	●	●	●	●	●			●	●	▲	◎	◎	◎	◎	●		●		◎	◎	◎	●	●				◎
	行事用	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●						●	●	●	●	●	●	●	
	牧夫が使用																					◎	◎											◎	◎	◎	

凡例　●：木製ゲル　　◎：鉄製ゲル　　▲：マイハン

住し放牧している場合，生活用のゲルともいえる。短期の放牧の場合は，家族のうちの一部や牧夫が臨時的な住居として使用する。かつては木製のゲルが大半であったが，2000 年代後半に入り，鉄製のゲルが急速に普及している。1 世帯で 2 つのゲルを保有していることもあり，その場合，1 つは放牧用，1 つは行事用として専用にしている事例も多い。鉄製ゲルの普及により，放牧には鉄製あるいは古い木製のもの，行事にはメンテナンスを施した木製のゲルを使用する。オボーやナーダム [1)] といった地域の伝統行事の際には当番の世帯がゲルを建て，客

人をもてなす。長寿の祝いの際にも同じく行事用のゲルを使用する。このような伝統行事が頻繁に行われていることが，ゲルの保有率の高さの要因となっている。

3.2 使用されているゲルの事例と特徴

1) 生活用のゲル

事例 17 では，2006 年，固定化拠点に畜舎を建築したが，居住用のバイシンは所有しておらず，実質一年中ゲルで生活している（**図 3-1**）。20 年以上前，夫妻が結婚した際に譲り受け，家族 5 人で使用していた。現在は娘 2 人が独立し，3 人で住んでいる。中央に炉を配し，周りには 3 枚の床板，フェルト，絨毯を重ねるという伝統的なつくりになっている。5 つの壁材（ハナ）を使用しており，この地域では一般的な規模のゲルである。

2) 鉄製オトルゲル

鉄製のゲルは 14 世帯が保有しているが，いずれも 2000 年以降，大半が 2005 年以降に購入している。700～1000 元（1 元≒15 円）程度で手に入り，安価であること（木製ゲルの場合 5000～12000 元程度），移動に自動車を使う世帯が増えたことが普及に繋がっている。また，牧夫を雇用する場合，鉄製のゲルを牧夫の住まいとすることが多い。

事例 7 は夏の間オトルで鉄製ゲルを利用する。2007 年までは木製のゲルを使用していたが，古くなり強風で破損したため，新たに購入した。ハナは 5 つあるが，木製ゲルよりも小規模である。面積が狭いため，炉を入口付近に寄せ 2 枚の床板を張っている。夏の間は，中央に炉を置くと，暖房になってしまうため，横へ寄せ，煙突も屋外から突き出るようにしている。

3) 木製オトルゲル

基本的には生活用ゲルと同じ構造になるが，放牧が短期間，あるいは放牧者が少人数である場合，床を張らずに土間のままというゲルがみられる。事例 24 では，近隣世帯の敷地を借りて委託放牧を請け負っており，ゲルは敷地の所有者のものを借りている。床板は張らずに，ベッドで代用している。夏のオトルなので寒さも問題ない。大きな家具はすべて近くにある敷地所有主の家から運んだ。土地の賃借と同時にゲルの賃借も生じている。

4) マイハン

マイハンは，かつて四季の宿営地から家畜を切り離して臨時に行うオトルで用いられていた簡易なテントである。現在このようなオトル自体が少なくなったが，事例 19 では，生活拠点であるゲルから，さらに臨時オトルを行う際に使用する。家畜の出産シーズンに，子羊をゲルのある生活拠点からわずか数 100m 離れた場所に移動させ，この家畜を守るため夜になると家族のうち 1 人が交代で番をする。マイナス 40 度を下回ることのある冬に暖房設備のないマイハンであるが，狭い空間でフェルト，毛布を重ねると暖がとれるという。骨組は家畜囲いの鉄柵，そのうえにビニルシートとゲルに使うフェルトを重ね，飛ばないように石でおさえている。

3.3 ゲルの利用時期

調査地では 1990 年前後からバイシンの導入が始まり，現在ではほぼ 100%が固定化拠点にバイシンを建築している。しかし，そこから敷地内の季節営地，あるいは借用地へオトルに出かける場合は今でもゲルが利用されている（**表 3-2**）。その使用期間は，2～3 ヶ月という短いものからほぼ 1 年中という世帯まであるが，家族が半年以上ゲルを利用しているという世帯が 9 世帯ある。これは臨時的な利用というよりもむしろ，生活拠点としてゲルが利用されているといえよう。

着目すべき点は，11 月から 2 月にかけての冬季，さらには家畜の出産シーズンである春季に至るまでオトルをする世帯が多いことである。冬季にオトルをしているのは 18 世帯であり，このうち 13 世帯で家族全員あるいは家族の一部がゲルを利用している。

既往研究では，寒さの厳しくなる冬季から家畜の出産シーズンである春季にかけての宿営地に固定化拠点を置く場合が多く，その期間は家族も家畜もバイシンで過ごし，夏や秋にオトルするという報告がなされている。しかし，本調査地では，不定期にオトルをすると回答した世帯を含めると，特に冬季のオトルが目立つ。これは，バイシンを建築する際，季節よりも井戸の位置を重要視していることなどが要因として挙げられる。土地が各世帯に分配されると，その敷地内でそれぞれ井戸を掘ることが必要となった。井戸には地形条件の制約があり，先に井戸を掘ってから，あるいは元からある井戸の近辺に畜舎と居住バイシンを建築した世帯が多い。冬は積雪した場合，雪が水分となるため，井戸がなくても放牧ができる。その為，バイシンから最も離れた場所を冬営地とし，冬にオトルをすることとなる。また，先に述べたように牧草が足りなくなる場合，借用地へ避難するという例も多い。

4. ゲルからバイシンへの変遷

ここでは，バイシンの実態を把握するに際して，まずはバイシンの導入過程とゲルからバイシンへの変遷について，既往文献や他地域の例を参考に整理する。（**図 4-1**）

4.1 ゲルの固定化

ゲルは，可動式の住居として遊牧生活の中でその機能が発展，確立してかた。しかし，17 世紀末頃から内モ

表 3-2　牧畜サイクルとゲル及びバイシンの利用状況

事例	世帯人数（ガチャ居住者）	土地面積(畝)	オトルの場所	牧畜サイクル 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
				冬営地	冬営地	春営地	春営地	春営地	夏営地	夏営地	夏営地	秋営地	秋営地	冬営地	冬営地
1	6(6)	6950	借・敷	▲■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	▲■	▲■
2	5(4)	5000	借・敷	■	■	■	■	■	●■	●■	■	■	■	■	■
3	3(3)	9000	無	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
4	4(2)	9000	借	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■
5	5(2)	8000	敷	●○	●○	●○	●○	●○	■	■	■	■	■	●○	●○
6	6(3)	–	敷	■	■	■	■	■	●	●	●	●	●	■	■
7	4(4)	–	敷	■	■	■	■	■	●	●	●	●	●	■	■
8	7(5)	8000	借・敷	●■	●■	■	■	■	●	●	●	●	●	●■	●■
9	5(3)	10000	敷	●■	●■	■	■	■	■	■	■	■	●■	●■	●■
10	4(3)	5000	借	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
11	4(3)	5000	借	●	●	●	■	■	■	■	■	■	■	●	●
12	4(3)	9000	借	●■	●■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	●
13	4(4)	2000	借	■	●	●	●	●	■	■	■	■	■	■	■
14	4(4)	–	借	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
15	4(4)	10000	借・敷	■	■	●	●	●	●	■	■	●	●	●	■
16	7(4)	9500	敷	●	●	●	●	■	■	■	■	■	●	●	●
17	7(4)	17000	敷	■●	■●	■●	●	●	●	●	●	●	■●	■●	■●
18	2(2)	7575	無	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
19	5(2)	–	敷	▲●	▲●	▲●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
20	5(2)	10000	借・敷	■	■	■	■	■	■	○■	○■	○■	○■	○■	■
21	4(2)	7500	敷	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■
22	4(1)	10000	借・敷	●○	●○	■○	■○	■○	■○	■○	■○	■○	●○	●○	●○
23	4(2)	8900	借	●	●	■	■	■	■	■	■	■	●	●	●
24	3(2)	–	借	■	■	■	■	■	●	●	●	●	■	■	■
25	3(2)	4700	借	●	●	■	●	●	●	●	●	●	●	●	●
26	3(3)	–	借・敷	●	■	■	■	■	■	■	■	■	■	●	●
27	2(2)	10000（兄弟）	敷	■	■	■	■	●	●	●	●	●	●	■	■
28	4(1)	10000（兄弟）	敷	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
29	5(3)	13000	敷	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
30	5(3)	9900	借	●	●	■	■	■	■	■	■	■	●	●	●
31	2(2)	9066	借・敷	●	●	●	■	■	■	■	■	■	■	●	●
32	4(2)	10000	借	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
33	3(2)	14000（兄弟）	借・敷	■	■	■	■	●	●	●	●	●	●	●	●
34	4(2)	9000	借・敷	■	■	■	■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	■	■
35	4(3)	12000	借・敷	○■	■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■	○■
36	3(2)	8000	敷	○■	○■	■●	■●	■●	■●	■●	■●	■●	■●	○■	○■

凡例　●：ゲル（家族が使用）　○：ゲル（牧夫が使用）　■：バイシン　借：借用地　敷地：敷地内
＊：不定期　無：オトル無し　—：不明　網掛け：オトル

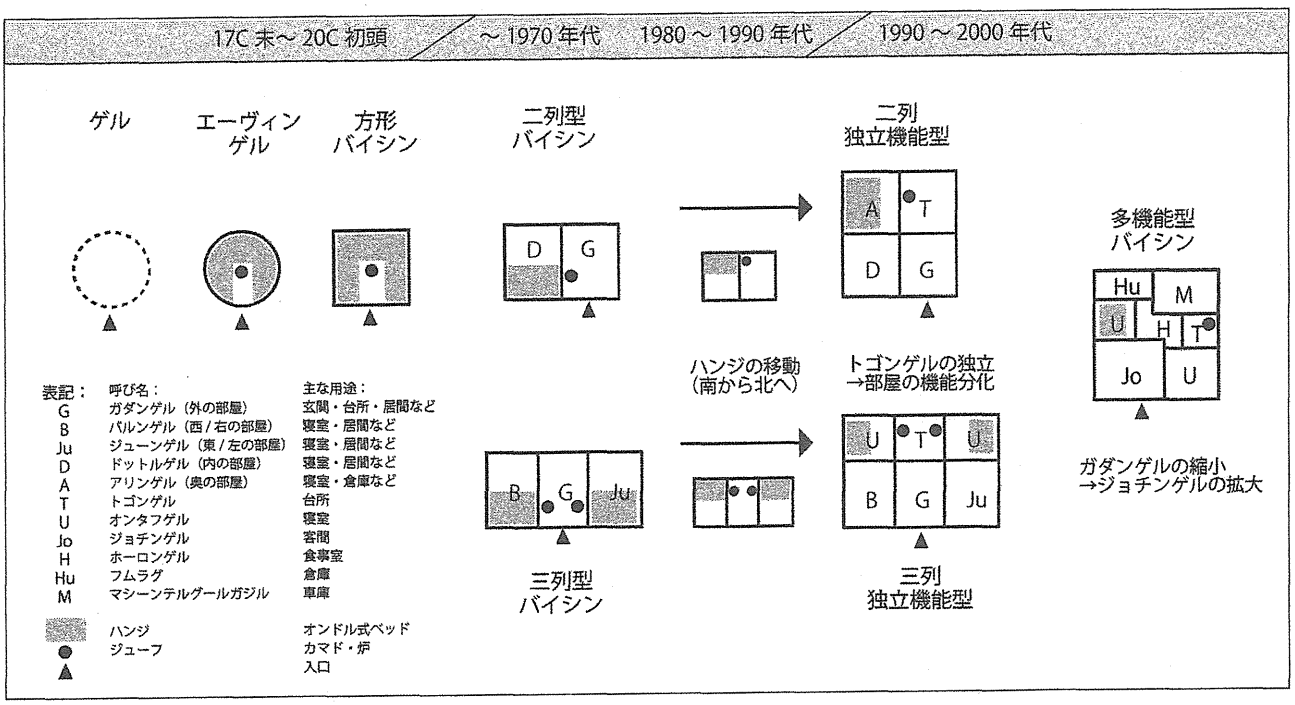


図 4-1　ゲルからバイシンへの変遷

ンゴル東北地域では定着化し，農耕を始めるモンゴル族もでてきた。その際にゲルの機能も固定化していく。モンゴル語でハナ（壁材）・オニ（屋根材）・トーノ（天井材）と呼ばれるゲルの骨組みは分解して運ぶことが可能であるが，ゲルの固定化に伴い，これらが土で造られるようになる。これを移動式ゲルとは差別化して，エーヴィンゲル（普通の/一般の家の意）という。エーヴィンゲルには中央の炉の周りにハンジ（漢語で炕：カン）と呼ばれるオンドル式の床暖房も備えられていた。その後，円形から方形へと変化するが，内部はゲルと同じく一部屋の空間であった[文1)]。

4.2　土造家屋の普及

20 世紀に入ると，二列型・三列型の土造家屋が普及しはじめる。これは，中国東北部農村地域での伝統住居のかたちで，内モンゴルへ移住してきた漢族の影響を強く受けていると考えられる。二列型の場合，入口のある部屋をガタンゲル（外の部屋），その横をドットルゲル（内の部屋）と呼ぶ。三列型の場合は，ガダンゲルを中央に挟みバルンゲル（西/右の部屋）とジューンゲル（東/左の部屋）を配する。ガダンゲルには炉（ジューフ）が設けられ，そこからドットルゲルやバルンゲル・ジューンゲルのハンジを暖めるという構造であった。この場合，ハンジは家族の食事，団欒，就寝等多くの機能をもっており[文6)]，1 部屋ですべての機能をもつゲルに近い居住環境であったことが予想できる。

4.3　ハンジの移動と機能分化

しかし，1970 年代に入ると，衛生面等の理由により，南の出入り口に炉を構えることを嫌い，北側に移動させる事例が増える[文7)]。これに伴い，ハンジも北側に移動する。後に，ガタンゲルから厨房機能が独立しトゴンゲル（台所）が登場する。更には，北側のハンジを有する部屋がオンタフゲル（寝室）として独立し，その他の部屋も機能が分化する。1990 年代になると，このように 2 列型・3 列型を基礎としつつも，奥にも部屋を配する独立機能型の構成が主流となってきた。また時期を同じくレンガ材の導入，及びストーブ／炉（漢語で烟筒・モンゴル語：ジューフ）やラジエーター（漢語：暖気）といった暖房機能の導入も進んでいる（図 4-2）。

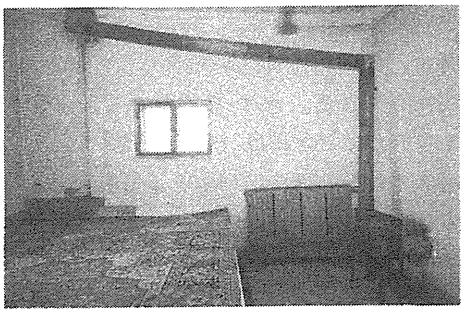


図 4-2　暖房設備

＊右奥：ラジエーター（暖気）　右端からのびる煙突：烟筒（ストーブや炉から煙突をのばす）　左：ハンジ

4.4　多機能型住居の普及

2000 年代になると，レンガ材の普及やラジエーター等の普及，さらには手軽な壁材やガラス材の普及等により，平面計画にも多様性がでてくる。

以上のような変遷のなかで，どの時点でバイシンを導入しているかが，モンゴル族の住環境の地域差を決定づける一要因であることが予想できる。

表5-1 建築年順各事例のバイシン概要

事例	建築年	材料	平面プラン	畜舎一体	二世帯一体	部屋数	暖房設備			ガダンゲルの用途	バルンゲル/トットルゲルの用途	バイシン使用時期
							ハンジ	烟筒	暖気			
16	1980年代	レンガ	二列型			3	○(北)	○		台所	寝間・居間・寝室	5-9月
18	1987	土	三列型			4	○(北)	○		玄関室	倉庫(かつては寝室)	1年中
7	1990	レンガ	—									11-5月
27	1991	土	—									11-4月
22	1994	レンガ	二列独立機能型		○	5		○		玄関室	寝間・居間・寝室	3-9月
34	1996	レンガ	三列独立機能型			8	○(中)		○	玄関室	寝間・居間	1年中
6	1998	レンガ	—									11-5月
25	1998	レンガ	—									3月
8	1999	レンガ	三列変形型			7			○	玄関室	蓄電室	11-5月
14	1999	レンガ	二列独立機能型		○	5	○(北)		○	玄関室	寝間・居間	不定期
15	1999	レンガ	三列独立機能型			7	○(北)	○	○	玄関室	寝間・居間	7・8・12-2月
28	1999	レンガ	二列独立機能型		○	4	○(北)	○		玄関室	寝間・居間・寝室	不定期
2	2000	レンガ	多機能型			9	○(北)		○	なし	寝間・居間	1年中
17	2000	レンガ	—									10-3月
5	2001	レンガ	二列変形型	○		2		○		台所	居間・寝室	6-10月
29	2001	レンガ	三列変形型			7	○(北)		○	玄関室	寝間・居間	不定期
10	2003	レンガ	二列変形型	○		3	○(北)	○		台所	居間・寝間	1年中
36	2003	レンガ	三列変形型			4		○		玄関室・簡易台所	寝間・居間	1年中
12	2004	レンガ	二列型独立機能型	○		4	○(北)	○		玄関室	寝間・居間	1年中
13	2004	レンガ	二列変形型	○		3	○(北)	○		台所	寝間・居間	6-1月
26	2006	レンガ	多機能型			7	○(中)		○	なし	寝間・居間	2-10月
1	2007	レンガ	三列変形型			6	○(北)		○	なし	寝間・居間	1年中
11	2007	レンガ	三列変形型			5	○(北)	○		なし	寝室	4-10月
3	2008	レンガ	二列型			3	○(北)	○		玄関室	寝間・居間	1年中
33	2009	レンガ	多機能型			6	○(中)		○	なし	寝間・居間	1-4月
4	1986→1992	土→レンガ	三列変形型			8	○(中)		○	玄関室	寝室	1年中
21	1994／1998	石・レンガ	二列型／二列型＝混合型			2／4	○(北)	○		寝間・居間／台所	寝室／倉庫	1年中
9	1990／1999	土／レンガ	三列型／三列変形型＝混合型			5／5	○(北)	○		台所／なし	寝室／寝間	3-9月
35	1982→2000	土→レンガ	三列独立機能型(四列)			8	○(北)		○	玄関室	寝室	1年中
32	1993→2000	レンガ	三列独立機能型			6	○(北)	○		玄関室	寝間・居間	不定期
31	1991→2005	レンガ	三列独立機能型			6			○	寝間	寝室	4-10月
20	1998→2005	レンガ	三列型→五列へ			6			○	寝間	居間	1年中
30	2000→2007	レンガ	三列変形型(四列)			10			○	なし	寝間・居間	3-9月

5. バイシンの導入過程と住まい方の変化

ここでは，調査地におけるバイシン導入過程と平面プランや住まい方の変化について述べる（**図 5-1・5-2**, **表 5-1**）。

5.1 二列型・三列型

調査地でバイシンの導入が始まったのは，1980 年代に入ってからである。1990 年の時点で，ガチャ内でバイシンを保有していたのは 10 世帯程度であった。この時期に導入されたのは，二列型・三列型のバイシンである。最も初期的なプランが残っているのが事例 16 と 18 で，事例 16 ではガダンゲルに炉を有し，台所機能を残している。ただし，ハンジは北側に独立して位置している（**図 5-1**）。事例 18 ではガダンゲルの炉が奥へ移動し，トゴンゲルが仕切られている。それに付随して両脇のハンジも北側に移動している。1980 年代頃から多くみられる典型的な北ハンジのタイプである。

5.2 二列・三列独立機能型

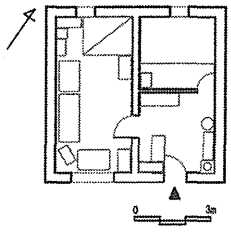
1990 年代になるとバイシンが普及し始め，特に後半にはその勢いが加速した。この時期に多く建てられたのは，二列型・三列型を基礎としながらもトゴンゲルが独立し，また各列の部屋数が奥に増加しているタイプである。いずれもガダンゲルは玄関室となり，その北側にトゴンゲルを配する。ハンジも北側にあり，奥が寝室や倉庫となっている。事例 28・32・12 ではいずれもガダンゲルに炉を有しているが，これは炉から煙突が部屋を横切り暖房する「烟筒」用のものである。事例 34 では「暖気」を導入している。また，部屋の仕切りも多く各部屋の用途が明確になっている。

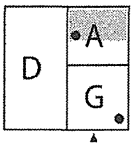
5.3 二列・三列変形型

2000 年代には，上記の変形したタイプが多くみられる（**図 5-2**）。二列変形型は，南側に部屋が増加したというよりも，二列独立機能型（4 部屋タイプ）の玄関室を省いたパターンであると考えられる。その為，トゴンゲルに直接入口が付いており，ここをガダンゲルと呼ぶ。この二列変形型は，多くが畜舎と一体になっており，建築費用を抑え，小規模なバイシンを必要としている世帯にみられる。

三列変形型は，三列型のバルンゲル部分が拡大し，ガダンゲルが消失しているものである。伝統的なゲルの空間構成においてバルンゲルは上位空間であり，ここが客間として立派なソファや電化製品の並ぶ居室となり，拡

事例 16 【二列型】

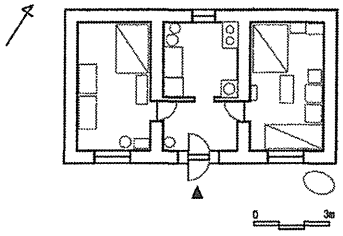


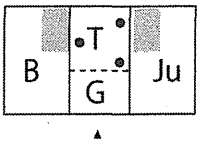


部屋の呼称：用途
G: 台所
D：客間・居間
A：寝室

建築年	1980 年代
材料	レンガ
家族数	7(4)
暖房	ハンジ・烟筒
使用時期	夏

事例 18 【三列型】

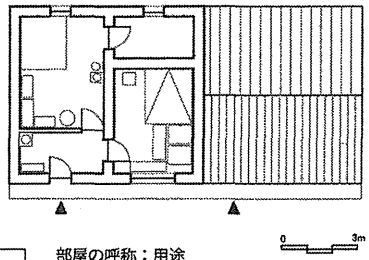


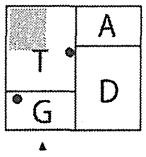


部屋の呼称：用途
G:：玄関室
B：倉庫（寝室）
Ju：客間・居間
・寝室
T：台所

建築年	1987
材料	土
家族数	2(2)
暖房	ハンジ・烟筒
使用時期	年中

事例 28 【二列独立機能型】

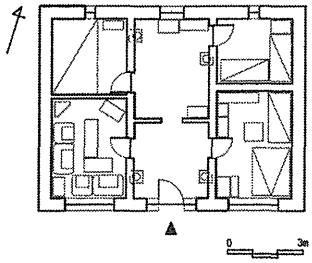


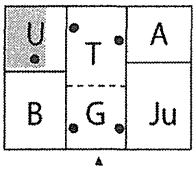


部屋の呼称：用途
G: 玄関室
D：客間・居間
A：倉庫
T：台所・寝室

建築年	1999
材料	レンガ
家族数	4(1)
暖房	ハンジ・烟筒
使用時期	年中

事例 32 【三列独立機能型】

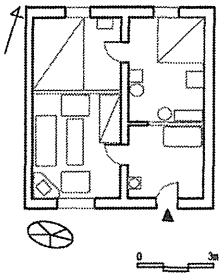


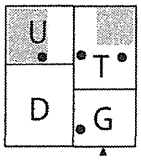


部屋の呼称：用途
G: 玄関室
B：客間・居間
Ju：寝室
T：台所
U：寝室
A：物置き

建築年	1993→2000
材料	レンガ
家族数	4(2)
暖房	ハンジ・烟筒
使用時期	年中

事例 12

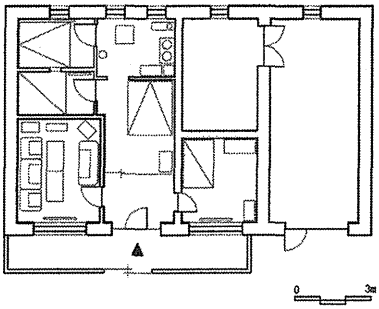


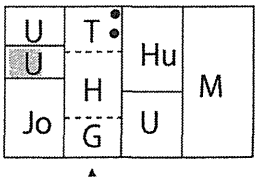


部屋の呼称：用途
G: 玄関室
D：客間・居間
T：台所・寝室
U：寝室

建築年	2004
材料	レンガ
家族数	4(3)
暖房	ハンジ・烟筒
使用時期	年中

事例 34





部屋の呼称：用途
G: 玄関室
Jo：客間・居間
U：寝室
T：台所
H：食事室
Hu：倉庫
M：車庫

建築年	1996
材料	レンガ
家族数	4(2)
暖房	ハンジ・暖気
使用時期	年中

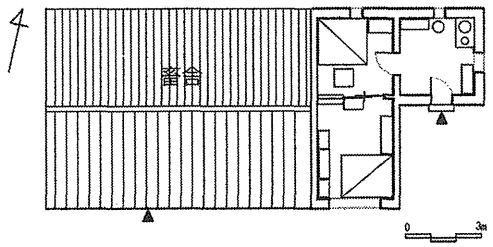
凡例

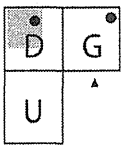
G：ガダンゲル（外の部屋）
B：バルンゲル（西の部屋）
Ju：ジューンゲル（東の部屋）
D：ドットルゲル（内の部屋）
A：アリンゲル（奥の部屋）
T：トゴンゲル（台所）
H：ホーロンゲル（食事室）
U：オンタフゲル（寝室）
Jo：ジョチンゲル（客室）
Hu：フムラグ（倉庫）
M：マシーンテルグルガジル（車庫）
ハンジ：オンドル式ベッド
ジューフ（炉）：カマド・ストーブ

図 5-1　調査事例のバイシン詳細 1

事例 10

【二列変形型】



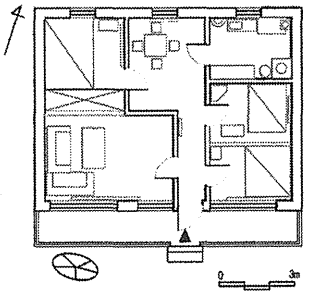


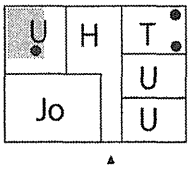
部屋の呼称：用途
G：台所
D：客間・居間
A：寝室

建築年	2004
材料	レンガ
家族数	4(3)
暖房	ハンジ・烟筒
使用時期	年中

事例 1

【三列変形型】



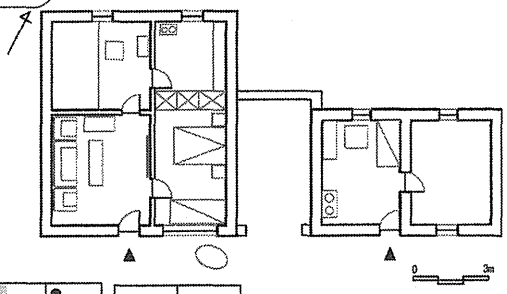


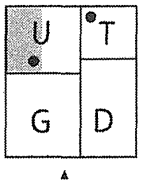
部屋の呼称：用途
Jo：客間・居間
T：台所
U：寝室
H：食事室

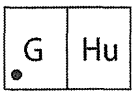
建築年	2000
材料	レンガ
家族数	6(6)
暖房	ハンジ・暖気
使用時期	年中

事例 21

【混合型】



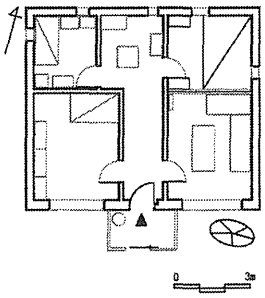


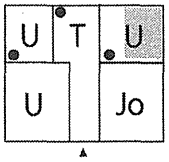


部屋の呼称：用途
G1：客間
D：寝室
U：寝室
T：台所
G2：台所
Hu：倉庫

建築年	1994/1998
材料	石 / レンガ
家族数	4(2)
暖房	ハンジ・烟筒
使用時期	年中

事例 11



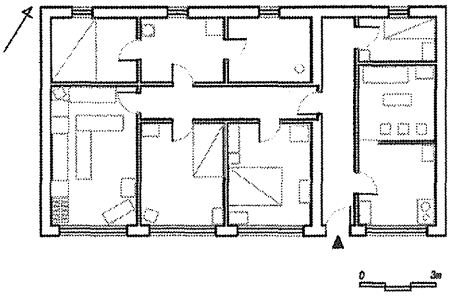


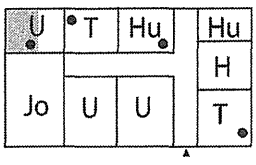
部屋の呼称：用途
Jo：客間・居間
U：寝室
T：台所

建築年	2007
材料	レンガ
家族数	4(3)
暖房	ハンジ・烟筒
使用時期	夏

事例 2

【多機能型】

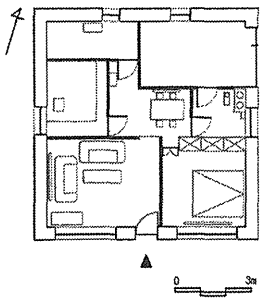


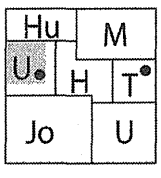


部屋の呼称：用途
Jo：客間
T：台所
H：食事室
U：寝室
Hu：倉庫
ボイラー室

建築年	2000
材料	レンガ
家族数	5(4)
暖房	ハンジ・暖気
使用時期	年中

事例 33





部屋の呼称：用途
Jo：客間・居間
T：台所
H：食事室
U：寝室
Hu：倉庫
M：車庫

建築年	2009
材料	レンガ
家族数	3(2)
暖房	ハンジ・暖気
使用時期	冬

凡例

G：ガダンゲル（外の部屋）
B：バルンゲル（西の部屋）
Ju：ジューンゲル（東の部屋）
D：ドットルゲル（内の部屋）
A：アリンゲル（奥の部屋）
T：トゴンゲル（台所）
H：ホーロンゲル（食事室）
U：オンタフゲル（寝室）
Jo：ジョチンゲル（客室）
Hu：フムラグ（倉庫）
M：マシーンテルグルガジル（車庫）
ハンジ：オンドル式ベッド
ジューフ（炉）：カマド・ストーブ

図 5-2　調査事例のバイシン詳細 2

大していることは注目すべき点である。ジューンゲルが拡大している場合もあるが，いずれにしても客間が重要な位置付けとなっていることが伺える。

5.4 混合型

二列や三列型のバイシンを併設し，間を繋いで車庫や倉庫とするタイプである。新旧のバイシンを有効利用したり，季節に応じて台所を使い分ける場合に多くみられる。外観は大規模なバイシンにみえるが，それぞれの平面はシンプルである。

5.5 多機能型

2000 年代，二列・三列型にとらわれない平面の多様性がみられるようになった。事例 2 では廊下に沿って部屋を配置しており，事例 33 では，客間に直接入るかたちとなっている。間仕切りもガラス材や木材パネルが使用されている。これまで位置関係で表わしていた各部屋の呼称も，すべて機能や用途を表わすものとなっている。

5.6 バイシン導入の特徴

調査地では，1980 年代以降のバイシンの導入後，4 章で述べた変遷に合致するような平面プランが確認できた。特徴的なのは，早期にバイシンを導入した事例が後に増改築を施した場合，三列独立機能型，三列変形型，混合型となり部屋数が多いことが分かる。また部屋数の増加と比例して暖気が導入されている。

独立機能型，多機能型へ大規模化，機能の分化が進む中，一方で 2000 年代にも小規模な二列変形型の建築がある。これは，同一敷地内で放牧を行う兄弟や親せきが宿営地を分けて牧畜経営を行うために，独立してバイシンを建築する場合にみられる。

婚姻時や，資金が確保できた際に新築する場合は，牧畜サイクル（バイシンを使用する人数や期間）に関係なく，最新の材料や技術を投入した大規模なバイシン建築がみられる。しかし，牧畜経営のなかで，これまでゲルを用いてオトル形式の放牧をしていた放牧拠点に建てる住居は，使用人数や頻度を考慮した必要最小限のものとなっている。

6. おわりに

本研究では以下のことが明らかになった。

1) バイシン普及率が約 100%という状況のなか，生活用ゲルは減少しているものの，一方で限られた土地を有効利用するため，あるいは土地の賃借等牧畜経営が多様化，集約化することによって中・長距離移動の必要性も増している。また冬季のオトルも盛んであり，可動式で防寒に優れたゲルの需要が拡大する可能性もある。

2) 鉄製ゲルの普及が進むと，家族の一部が移動する簡易オトル，あるいは牧夫の雇用が盛んになり，牧畜民の居住環境に格差が生じる可能性もある。一方で，木製のゲルは高価で厳格のあるものが新調され，伝統的なゲルの保有がステイタスとしてとらえられる傾向もある。

3) 調査地では，約 10～20 年の間に，ゲルから一気に独立機能・多機能型バイシンの導入が進んでいる。バイシンの規模や設備などが，牧畜経営のサイクルや人数等と必ずしも対応しているとは言い難く，今後は牧畜地域に適した材料や間取り，規模などを考察する必要がある。

＜注＞

1) 盟（モンゴル語ではアイマグ）：内モンゴル自治区の行政単位で市に相当する。
2) 旗（モンゴル語ではホショー）：内モンゴル自治区の行政単位で県級行政区に相当する。
3) 鎮や郷に相当するのがモンゴル語のソムで，近年統廃合が進み鎮の建設が増えている。ガチャはその下位単位で村に相当する。
4) オボー祭：自然崇拝に基づいた祭祀儀礼である。オボーとは，山や湖，川といった自然を祭る場合，歴史的な英雄を祭る場合，土地の境界を示す場合などその目的は様々である。
ナーダム：ナーダム大会は夏に行われる伝統的な娯楽の祭典である。「男子三大競技」と言われる競馬，相撲，弓を中心としているが，現在，参加者は男子に限らず，また弓に代わって別のコンテスト（歌唱等）が行われることがある。

＜参考文献＞

1) 海日汗：モンゴル族住居の空間構成概念に関する研究—内モンゴル東北地域モンゴル族土屋家屋を事例として—，日本建築学会計画系論文集 579，pp. 179-186, 2004
2) 包慕萍：モンゴルにおける都市建築史研究—遊牧と定住の重層都市フフホト，東方書店， 2005
3) 呼日拉沙 主編：草原文化区域分布研究，内蒙古教育出版社，2007
4) 利光有紀：“オトル”ノート—モンゴルの移動牧畜をめぐって—，人文地理，第 35 巻第 6 号，pp. 68-79, 1983
5) 小長谷有紀：モンゴル草原の生活世界，朝日新聞社，1996
6) 計文浩・野口孝博他：瀋陽市近郊農村におけるカンの生活様式と空間構成—中国東北地方の北方系居住様式に関する研究—，日本建築学会技術報告集，18，pp. 245-249, 2003
7) 野口孝博・月舘敏栄他：ハルビン市近郊農村におけるカンを中心とする戸建住宅の空間構成と住まい方—中国東北部の北方居住様式に関する調査研究—，日本建築学会技術報告集，17，pp. 309-314，2003

＜研究協力者＞

野村理恵 奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程
芦田奈緒 奈良女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程
オドンゲレル 内蒙古婦女幹部学校・副教授